

平成27年度第8回「知事と一緒に生き生きトーク」の発言要旨

- 1 テーマ：地域おこし協力隊ただいま活動中
- 2 日時：平成28年1月12日（火）
- 3 場所：津山市阿波出張所研修室
- 4 参加者：地域おこし協力隊と協力隊の受け入れを行っている地域の代表者の方々 8名
- 5 知事挨拶

岡山県で地域おこし協力隊として約90人が活動しているが、これは大変ありがたい話で、一人ひとりの頑張り具合が凄く、こんなに費用対効果が高い施策は行政の施策として大ヒットだと思う。今日の参加者を始め、意欲的な人達が高い志を持って地域に飛び込んでいって、地域を大きく変えていくことは、日本を変えていく思いがしている。地域がより良いものになるように、活動地域を選んだ理由や活動内容、地域に入ってから感じたギャップややりがいを感じたこと等を聞かせていただきたい。

6 発言内容等

【協力隊になったきっかけ、地域を選んだ理由】

- ・地域の取組みに心惹かれて活動地域を選んだが、実際に暮らしてみて風景に一番魅力を感じている。
- ・子どもを伸び伸びと緑の多い所で育てたい思いがあり、蛍の乱舞を見た時に心が動いたことがきっかけとなった。以前、商店街の活性化などの地域活動に取り組んでいたことがあり、それをもっと形にしたいと思った。
- ・被爆体験の語り部をする中で、都市部の生活は消費するだけで、自分で作り出すことがなく、生きる力が足りないと思ったことが協力隊になるきっかけだった。
- ・高校の校長先生と話す機会があり、地域の課題を解決していける高校生を育てることができる魅力的な授業を作っていきたいという話を聞き、自分もそれに関わりたかった。
- ・前職で営業をしている時に、経営者になりたいと思い、起業を考えていた。起業ができる制度を探していたところ、協力隊の制度を知り、募集自治体の思いと自身の思いが一致した。
- ・大学で農村の研究をしていたが、机上で学ぶだけでなく、現場にでたいと思い、協力隊の制度を活用した。制度が始まったばかりで、当時は募集をしている自治体も少なく、農村で募集をしていたのは岡山県だけだった。

【活動内容】

- ・あば村運営協議会では地域の活性化を目指し、あば村宣言を行った。住民出資の合同会社を立ち上げ、ガソリンスタンドの運営等に取り組んでいる。
- ・食と健康をメインテーマに地域の気候風土が生み出す食材の豊かさを通して特産品の開発、PRに取り組んでいる。
- ・耕作放棄地を活用し、蕎麦の栽培や加工品作りなど、6次産業化の取組を地域の方と協力して進めている。また、人口減少により地域商業が衰退した地域で、食生活インフラを最低限支えるためのカフェを始めた。
- ・飲食店経営や商店街活性化などの経験を活かし、空き施設の活用（廃校での結婚式）や出張レストラン等を行っている。また、協力隊全体のマネジメントを担当している。
- ・地域のエネルギーのある人達の補助をする形で廃校を活用し、地域の特産品のお茶を加工して、スイーツを提供するカフェや介護予防の取組を行っている。
- ・協力隊3名と地域おこし企業人1名で高校の魅力化活動を行っている。また、商店街の活性化のため、銀行跡地を活用した地域の人が集える多目的スペースを整備している。
- ・キャンプ場の管理、地域の人と一緒に特産品の開発や来訪者の対応を行っている。
- ・棚田の再生や古民家を改修したカフェの運営、棚田を活用したイベントの実施など都市・農村交流を行っている。
- ・協力隊の任期後は定住して、稲作やニンニク栽培など農林業に従事しながら、キャンプ場の運営や執筆活動、みんなの孫プロジェクト（高齢者から依頼を受けて草刈りや農作業の手伝いをしながら一緒に食事をしたり話し相手になったりする）等の仕事を作りながら暮らしている。

【協力隊の活動により地域が変わったこと、やりがい】

- ・地域の人が自治体の枠を越えて集まれる場がなかったが、毎月、料理教室等を主催することで、そういう場をつくることができ、交流の機会ができた。

- ・物事を進めようとしたときに昔からの地域のしぐらみがあるが、協力隊が入ってきたことで、地域の関係性の調整が図られるようになった。
- ・交流定住センターの運営をしているが、協力隊は移住者の先輩としてのアドバイスができるので、移住のつまずきや不安の相談に乗りやすく、より近い立場で話をするができる。
- ・20～30代の地元の若者と交流し、地域のためになにかやりたいという思いを吸い上げ、サポートすることで、子ども向けのイベント等を実施して、地域を元気にしていくような団体を立ち上げることができた。

【協力隊になって感じたギャップや困り事】

- ・地域のニーズと行政の思惑のギャップに悩んでいる。（板挟みになる）
- ・地域の規模によって求められることが違い、地域独特のしぐらみがある。
- ・地域のしたいことをどうやったら実現していくかを一緒に考えていくことがメインになっていて、自分のやりたいことと地域のニーズが合致していなかった。
- ・明確な役割がなく、先輩隊員の活動を視察して勉強をしていますが、何に取り組んでいっていいのかわからなかった。また、地域の人が何を求めているのかわからず、絡みづらい部分があった。
- ・都会は若い方向けのまちづくり、田舎は高齢者向けのまちづくりをしていて、若者が近寄りづらい環境になっていると感じた。
- ・任期終了後は地域からいなくなるという目で見られ、活動報告をしても、話を聞いてもらえないこともあったりしたが、客観的に見てくれる大学の先生などに相談をしていた。

【地域がより良くなるために何が必要であり、どんな取り組みをしているか】

- ・地域の中だけで解決できないこともあるので、取り組みを外に広げていき、外の人に来てくれたときに特典が得られるようなサービスを考えないといけない。また、幅広い人に興味を持ってもらうため、地域の暮らしに根ざした物づくりツアー体験を企画し、地域の人と外から来た人が交流できるように考えている。
- ・地域の求めることと協力隊個人のやりたいことのコーディネートから始め、お互いのニーズを一致させないといけないと思った。
- ・維持、継続を考えると、協力隊が主導するよりも、地域が主役となり協力隊は調整役として企画やアシスト役を担う方が、取り組みが地域に根付いていきやすい。
- ・それぞれで活動をしているグループが力を合わせればもっといい取り組みができるので、横の繋がりを作るために、地域の中のどこでどんなことがやりたい、といった情報を集めて、情報誌を作り、配付している。
- ・地域の中に最低限の人が集える拠点施設を作り、婚活や交流会等のイベントを実施し、地域の情報を外に向けて発信することで交流人口の増加を図っていく。
- ・地域の人に主体となって活動してもらうことが難しいとき、地域の人に協力してもらえようように変わってもらう必要がある。そのために徹底して、話しかけることを決め、地域にだけ込んでいき、地域住民に自分たちの方を向いてもらえるように取り組む必要がある。

7 知事のまとめ

- ・一人一人が地域に飛び込んで、自分で直接取り組むことも大事だが、地域のニーズを汲み取り、地域をコーディネートすると成功する確率もあがる。
- ・「決めてやる」ということは大事なことで、自分の地元ではなかなかできないが、協力隊のように自分の住んでいた地域とは明らかに違う環境に来た人にはそれがやりやすい。地元の人にとってもいい刺激になるし、お互いに成長することができる人材育成の場となる。
- ・協力隊の方が孤立することなく、より活躍しやすいように、横の繋がりづくりを目的とした交流会等を県では実施している。悩みごとや課題解決のための相談役としては、協力隊OBのような立場の人が適しているのではないかと思う。
- ・状況に慣れるということは良い意味で適応することだが、反面、感度が鈍るということでもある。協力隊のように外から来た人は凄くパワーがあるので、ワカモノ、ヨソモノ、バカモノの強みで、空気を読みすぎずに、地域を活性化させてくれることを期待している。